

第3章. 現象思考学的視点から見える文化と文明と歴史の姿

3. 1. 文明と歴史の根源を探す

文明と文化はどう違うのか、という問いが發せられる時、多くの人々は心の中にそれに対する解答を持ち合わせているだろう。しかし、言葉の上で定義しようとするとは容易には答えられないだろう。

文明と文化をその反対語らしきものと合わせて思い浮かべてみよう。厳密に考えずに心象レベルでよい。文明の反対語は野生とか野蛮とかだろう。文化の反対語は自然とか天然ということになるだろう。

文明にも文化にも人間が関係している。そして、自然という言葉には文化という言葉のイメージが常につきまとう。即ち、自然という言葉の裏には、人間の存在がほの見えるのだ。ということは、自然という言葉は文化の反対語には相応しくないようだ。

反対語らしきもので考えてみる時、野生には人間の匂いがするが天然には人間との関係を断ち切っているイメージが強い。この切り口から文明と文化の違いが浮かび上がってきそうである。

私たちがこれまで学んできた歴史とは文明を対象としている。有史以来という言葉は文明の發生以来という表現に置き換えることができる。しかも、この歴史過程の中には文化がしばしば顔を覗かせる。

そうではあっても、やはり歴史の本流は文明の流れなのである。私たちの“歴史”として現れている現象は、未分化なるものを知によって分化し、明らかにしていく過程を表現しているからだ。この“分明”こそが文明であり、“分明”の過程、即ち文明の發展過程こそが歴史なのである。

丸山圭三郎先生の言葉を勝手に借用させて頂いてよいのであれば、言分け（ことわけ）の過程が文明の發展過程と言えるだろう。

人間は何をどのようにして言分けるのであろうか。未分化なるものとは一体何なのであろうか。これを解く鍵がソシュールの言語学とかユングの心理学とかの中に在ると言えそうだ。

地球上に発生したままの人間は野生そのものであり、文明の一片も持っていなかっただろう。そんな人間にどのようにして文明が発生したのか。このことについて考えを進めていくことにしよう。

人間も他の動物も、同じように知覚能力と反応器官を与えられたにもかかわらず、何故人間だけが野生の中から文明を生み出したのだろうか。ここで再び丸山圭三郎先生の言葉を勝手に借用させていただく。

知覚と反応器官により、未分化なるものを分化していくことを身分け（みわけ）と呼ぶことができるだろう。即ち発生したままの人間や動物が外的世界の中で行っているのは身分けなのである。身分けからは文明は生まれないだろう。文明の発生の根源は人間のみが与えられた言分け能力にあるとみられる。

言分け能力とは一体何か。言分けとは、その行為に内的な世界が絡む。その内的な世界こそが言語の発生の根源である。言語学の成果によれば、言語の発生の根源は無意識の領域に在るという。そして、無意識の領域の中に在るものは未分化なものだと言えるのだ。

未分化なものが分化されるとは、無意識の領域に在るものが意識の領域に現れるということだ。天は人間にのみ無意識の領域と意識の領域との間を往来できる通路を与えたのであろう。これが言分け能力の源である。

ユングによる無意識の研究成果は、私たちに無意識の領域に在るものの形成のされ方を教える。彼の研究成果は無意識の領域の3種類の在り方を示す。

その第一は、人間集団に先天的に与えられるものとしての普遍的無意識、その第二は、人間集団が世代を重ねていく過程で生成される集団的無意識、そして、その第三は、個が個の経験の中で沈澱させるものとしての個人的無意識である。

発生したままの人間の無意識の領域には、先天的に与えられた普遍的無意識のみが存在していたのだろう。それは人間という種が外的世界の中で生きていく上で、必要最小限の内容がプログラムされたものだったのだろう。これを否定したら人間の発生、更にはその後の存続が有り得ないことになってしまう。

ここまでの論旨を踏まえて、これまで野生という言葉を使って表現してきたものを、未分化質という言葉に置き換えることにしよう。

この思考の到達点は次の通りである。

「文明とは無意識の領域に沈澱している内的なもの、即ち未分化質が外的に具象化した結果であり、未分化質とは文明を含めた外的なものが構成する環境の下で、無意識の領域に内的に沈澱したものと先天的に与えられていたものとの総合である」

文明と未分化質とは、外的具象化と内的沈澱とで構成される環の上で相互転換を繰り返す。この相互転換は弁証法的運動そのものであり、螺旋状の運動である。

以上のような文明の見方から文化を定義することができる。文化とは文明と未分化質との相互転換の持続的な運動にエネルギーを与え、転換した結果の形態を支配するものと言うことができる。

従って文化とは、文明にも未分化質にも、その底流に共通して流れているものの概念であり、人間の存在が関わっている限り、そこには文化が存在しているのである。

文化の反対語らしきものとして天然がイメージされるということは、天然という言葉の示すものが全く人間に関わっていないという印象を与えることによるのだろう。

人間がありのままに存在することを自然という言葉で表現することがあるが、それはそれで妥当な意味を持っていると言えるだろう。ただ、その時に使う言葉はあくまでも“自然”であり“天然”ではない。

こうした文明論に基づいて歴史を見ると次のようなことが言える。

上記の所論で文明とは何かを明らかにしようと試みて、歴史という言葉を使った。だが、歴史という言葉は文明を説明するために存在している訳ではない。ここで歴史というものを明確に定義しておく必要があるようだ。文明の流れの現在の到達点とも言える、西欧近代主義を語ろうとすれば、歴史という概念を抜きにはできないからだ。

私たちがこれまでに学んできた歴史とは文明を対象としていると、前に述べた。また、文明と未分化質とは外的具象化と内的沈澱とで構成される環の上で、相互転換を繰り返す弁証法的運動を行うとも述べた。

内部にある未分化なるもの、これが未分化質である。未分化なるものを知により分化していく過程が文明の発展である。外的に具象化された環境、即ち文明の環境の中で生きている人間の内部には、その環境の働きかけによって未分化なものがさらに生成され、沈澱する。これが既存の未分化質に変化を与える。

ここの処に歴史とは何かがほの見えている。即ち、文明と未分化質との相互転換という弁証法的運動において文明に着目し、文明の変化の流れを時間軸上で表現するもの、これが歴史なのである。

従って、歴史の裏側には未分化質の運動が隠れているとすることができる。この弁証法的運動の場を、時間軸をも含めて現象空間と呼ぶことができる。歴史は、自らを大きく包み込む現象空間の中に在る。

第1章に取り上げた、レヴィ・ストロースとサルトルとの歴史について論争を再び取り上げてみよう。

この論争の軍配はレヴィ・ストロースに上がっていると見てよかろう。本論の思考の流れから見れば当然のことだ。サルトルは歴史を一本の流れとして捉えた。いわゆる“未開人類”と西欧社会の人類とを歴史の同じ段階にあるものとして捉えることができなかった。“未開人類”は将来、歴史の流れの中で西欧社会の人類と同種の文明を持つようになると考えていたようだ。

言い換えれば、西欧近代主義的な意味での歴史は西欧固有の現れ方をしているものであると受け止めることができなかったのだ。“未開人類”の社会と西欧近代社会とには同一の構造を持っている部分があることに、レヴィ・ストロースが気付いたことがサルトルの歴史観を否定することになった。

「歴史なんて本当にあるの？」というような意味の問い掛けを、レヴィ・ストロースがサルトルに向かってしているのは、サルトル流に考える歴史など有りはしないということの表現であり、歴史を否定したわけではない。

“未開人類”も西欧社会の人類も、それぞれの持つ文明と未分化質との相互転換という弁証法的運動の中で生きているのである。そしていずれの人類も、人類という種が外的環境の中で生きていくために必要な最小限のプログラムを無意識の中に与えられて発生したのだ。レヴィ・ストロースの言うところの同一の構造は見い出されて当然なのだ。

この論争の底流にあるものは、現象思考学の原則の1つ「一切の先入見から離れて事象そのものに向き合うこと」の実践である。レヴィ・ストロースは文化人類学者として、全ての人間や人間集団をこの原則に則って見ていた。サルトルは哲学者・現代思想家として、ヘーゲルやマルクスの影響下から抜け出せなかったのだろう。彼らの歴史哲学や史的唯物論を一旦脇に置いて人間や人間集団を見ることができなかったのだと思われる。

あえて一言付け加えておこう。西欧社会の人類が歴史に働き掛けて主体的に生きており、“未開人類”が天然の（あえて自然のとは言わない）環境の中で受動的に生きているという捉え方は誤りである。

いずれの人類も、それぞれの相互転換という弁証法的運動の中で、自然に（ここはあえて自然にと言う）生きていると言うべきなのである。

3. 2. 西欧近代主義を特徴付ける武力

レヴィ・ストロースとサルトルとの歴史についての論争は、3. 1章に示した通りである。レヴィ・ストロースが批判した歴史観はまさに、西欧近代主義の特徴を白日の下にさらけ出した。それは、人類の歴史とは未開社会から近代社会へと発展していく過程であるという歴史観だ。

このような歴史観においては、未開人たちの社会は歴史の初期の段階にあり、西欧近代社会は歴史の発展した段階にあるとする。従って、未開人たちの社会も歴史の法則に従って発展し、やがては西欧近代社会と同等の段階に到達すると考える。

ここでよく考えてみようではないか。同じ時代に存在しながら、一方が歴史の発展段階の初期にあり他方がその後期にあると、何を根拠に言えるのだろうか。西欧社会が発展の初期段階にあった時、現代のいわゆる未開人たちの社会と同じ社会を形成していたのだろうか。また、その時には現代のいわゆる未開人たちの社会は現在と同じであり、歴史の法則に従う発展をしなかったのだろうか。

誰もが直感的にじっくりしないものを感じ取ることだろう。歴史の法則を認める限り、西欧社会の未発展段階は、現代のいわゆる未開人たちの社会とは異なっており、西欧社会が未発展の頃の現代未開人たちの社会も現在の彼らのものとは違っていたと考えるのが妥当である。

西欧近代主義の精神は何によって発展段階の区別を付けたのだろうか。どのような状態にある文明が発展段階が高く、どのような状態にある文明が発展段階が低いとしたのだろうか。

その答は西欧近代主義的に解釈される歴史そのもののの中に現れている。即ち、征服者あるいは支配者の持つ文明が発展段階が高いとされ、被征服者あるいは被支配者の持つ文明が発展段階が低いとされたのである。西欧近代主義の根源の一つが海洋に拡大していく活動と植民地支配に在ったことを思い起せば、このことに納得がいくだろう。

征服と被征服、支配と被支配との関係を決めたのは武力であった。（今では必ずしもそうではないが）。ここで従来の固定観念的な物の見方を逆転させてみようではないか。文明の発展度が低いから武力が弱小であり被征服者となったのではなく、武力が小さかったがために征服されてしまった人類社会の文明を、発展度が低いと決めつけたのだ。

言い換えれば、文明の発展度に対して武力の大小を基準にして点を付けたのである。西欧近代主義の特徴はここに極まる。即ち、西欧近代主義文明をその根源において特徴付けているのは武力なのである。

東洋の中国の歴史の中にはこのような特徴は見られない。武力による征服者の文明は必ずしも発展度が高いとは受け止められていない。また、古代では西欧においてさえ、武力征服者の文明は必ずしも発展度が高いとは見られていなかったと言えるだろう。

文明の発展度に依拠する歴史観はまさに、西欧近代主義そのものである。そして、文明の発展度という概念の根源は武力にある。多くの歴史上の現象の集まりが表現している意味は、こういうことなのだ。

武力は暴力とは違う。暴力とは未分化質を構成する一要素である。一方、武力とは、人間集団の無意識内に沈殿していた未分化質が外的具象化され、文明の一部を構成するようになった一つの要素なのだ。

武力の行使が多く富をもたらすことを、繰り返し経験した人間集団の無意識内に沈殿したものが、外敵具象化されて西欧近代主義の歴史観となったとみてよいだろう。

現代の地球上の世界を見回してみる時、現代は未だ西欧近代主義の強い影響下にあることを痛感させられる。国際社会のリーダーにあっては相変わらず最強の武力が必要とされているのである。

こうした視点から言論の自由についても考えてみたい。

3. 3. 言論の自由—西欧近代主義の華

言論の自由は西側先進国の間では至上のものとして受け止められている。これを否定する者はいないだろう。しかし、言論の自由は絶対的に至上のものと言えるだろうか。

そう遠くない過去のある事件が、このことを考えさせるきっかけを作った。その事件とは小説「悪魔の詩」の作者サルマン・ラシディ氏に対するイランのホメイニ師からの死刑執行宣言である。

言論の自由の侵害であるとして、西側諸国から非難の声が上がったのは当然のことである。だが、イスラム世界の反応は複雑だった。ヨーロッパに住むイスラム教徒の中には、言論の自由を擁護する発言をした人々もあり、そのために命を失ったイスラム僧職者もいた。

この事件に絡む現象が表現する意味を掴む上で重要なことは、このようなイスラム教徒たちは西欧社会の中で生活していたこと、一方、ホメイニ師の指令に従って行動したイスラム教徒たちもいたこと、この両面を合わせて底流にある意味を掴みにいくことである。

ホメイニ師の説くイスラム原理主義が何故言論の自由と対決することになったのか、これについての議論は別の機会に譲ることにして、ここは言論の自由が存立するための基盤について論ずることになろう。

現代の世界を見渡してみよう。政治状況、社会状況が安定している国ほど言論の自由が広く認められていると言えよう。政治状況、社会状況が安定しているとは、一言で言えば国が安定しているということであり、国が安定しているとは国家の主権が転覆されにくいということである。

歴史の示すところでは、国家の主権を転覆する最終の手段は武力である。フランス革命、アメリカ合衆国独立、ロシア革命、中国革命、ベトナム戦争など世界の歴史の前面に現れるものから、小さなものではフィリピンのマルコスからアキノへの政権移動のようなものまで、いくらでも例を挙げることができる。

同様に、国家主権の転覆に対する耐性を保証するものも武力なのである。強大な武力を掌握している主権国家は少々のことでは揺るぎはしない。国民の1人ひとりが何を言おうとも、それが国家主権の転覆に至る可能性が無い限り放置しておいてもよいのである。ここに言論の自由の基盤がある。

主権国家が強大な武力を掌握できる拠り所は、国民的コンセンサスである。国家機構がそのような武力をいつでも行使し得る状態で保有することを、国民が認めるということである。

それは国家主権の在り方を国民が受け入れるということに他ならない。このようなコンセンサスが培われる基盤は、ある国では民主主義であり、またある国では思想やイデオロギーであり、また別の国では民族の誇りや宗教であるが、西欧近代主義のもとでは国民主権がうたわれることが前提だろう。

国民主権のもとに建国されている主権国家において、国民的コンセンサスを得て国家機構が強大な武力を掌握している場合に、言論の自由は存在する。言論の自由は武力を背景とした、まさに西欧近代主義の体現なのである。

西欧近代主義の下に存在していたにも拘らず、言論の自由が制限された国があった。一連の社会主義国家群である。これらの国々は強力な軍隊を持ち、強大な武力を掌握しているように見えたが、そうではなかったのである。

これらの国々に欠けていたものは国民的コンセンサスであった。国民が広く知見を得ることになれば、当時の国家主権の在り方を国民が受け入れなくなり、国家主権の転覆があり得ることを権力者たちは感じ取っていたのである。

このような権力者たちにとって言論の自由は認められないことであった。見かけは強大だが、国民的コンセンサスを基盤に持たない武力は弱いもので、結局はベルリンの壁の崩壊以降の世界が展開することになったのである。

3. 4. 現象思考学的歴史観から見えてくる21世紀以降

17世紀の半ばからの350年間は「理性の解放」の時代であった。解放された理性は科学的思考と合理主義の旗を高々と掲げ、科学の体系を作り上げ、資本主義の機能を高めていった。資本主義的な人間活動の中に根付いた科学は、技術の発展を促して人間生活に変貌をもたらした。これが、西欧近代主義の生成、発展、成熟の過程である。

20世紀はその最後の世紀になるようだ。20世紀は物質的生活の豊かさの追究のために経済発展を至上として、科学や技術の発展をフルに利用した。経済発展は人間の生存のための条件である環境、健康、そして安全を犠牲にすることも厭わなかった。

20世紀も最後の20年になると、経済発展に対するアンチテーゼが表舞台に姿を見せ始め、科学技術に対する疑念の兆候さえも顔を覗かせるようになった。しかし、経済的発展を求める後発国や開発途上国では、相変わらず西欧近代主義的文明の実現に向けた行動が取られている。

だが、その行動の根底にあるものをしっかりと見据えてみると、先進国・先発国とは異なるものが浮かび上がってくる。後発国や開発途上国の行動の根底にあるものとは、彼らの持つ文化である。

文化とは文明と未分化質との相互転換の持続的な運動にエネルギーを与え、転換した結果の形態を支配するものであるのだから、後発国や開発途上国が将来実現すると思われるものは、先進国・先発国とは異なった形態を持つものになると考えられるのだ。

以上のようなことを取り入れて人類の進路を考えてみると、21世紀に続く200～300年は「人間存在の見直しと確立」の時代となりそう。特に21世紀の100年は、人間存在の基本条件であり、かつ人類の持続的生存の条件でもある「健康、安全、環境」の追究のために多くの人々の英知が集められることになるだろう。

歴史は文明の自律的な力で動かされるのではない。歴史を動かす原動力は人間が作り出した文明と、文明を含む環境の中で生きる人間の無意識内に沈殿した未分化質との相互転換の中にある。

文明とは人間の無意識に内的沈殿した未分化質が意識化され、外的具象化されたものなのだ。そして、文明は人間の意識に働きかけて、人間の無意識の中に未分化質という沈殿物を生み出し、これが多様な相を形成していく。この「外的具象化と内的沈殿の相互作用」こそが歴史を動かす推進力なのだ。

このように歴史を捉えると、20世紀までの350年間に人間の無意識の中に内的沈殿し続けてきたものが、或る相を持つ未分化質を形成しており、これが21世紀以降の数百年にわたって意識の領域に流れ出し、外的具象化され続ける。こうしたことが新しい文明を生み出し、次なる歴史を作り出していくことになるだろう。

これが現象思考学的歴史観から見えてくる21世紀以降である。